

# 硝子ふる島で

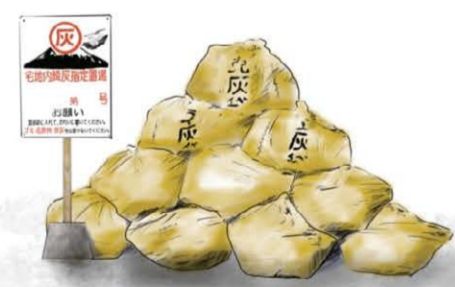
- 野生のガラスとは -

今日、ガラスは人間によって色や形態等の性質を制御されている。この制御から逃れ、宝石のように大地の意志により性質が変化する、偶発性を孕むガラスが「野生のガラス」として私は考えた。対象地は桜島、硝子(火山灰)の降る島である。現在、火山灰が厄介者として扱われるこの島で、“野生のガラス”によって「人と大地との関係」を伸介、顕在化する新たな風景の提案を行う。



退避壕 黒神町エリア

## 灰捨て文化の更新 火山灰硝子という可能性



### 桜島

桜島は現在も活動を続ける活火山であるが、約 5000 人もの島民が生活し、観光客も多く訪れる島である。この島の最も大きな特徴として降灰があり、島民は昔から火山灰と日常的に向き合ってきた。

### 灰捨て場

現在、火山灰は「克灰袋」と呼ばれる黄色の袋に詰められ、産業廃棄物として処理されている。ネガティブなものとして扱われるこの野生のガラスを、地域の特徴として前向きに捉え、降灰が楽しみになるような灰との付き合い方を提案する。

### 火山灰硝子の色

毎月、各集落ごとに回集した火山灰を決まった量のソーダ灰と混ぜ、各集落の火山灰ごとに硝子へと加工する。降灰量により硝子の色は変化する(左図)。硝子の表情は島の表情として、噴火する島の姿が使用者の目に浮かぶだろう。また、灰は島に不均一に降るため、製造される硝子の色は集落ごとに異なる。この火山灰硝子は地元の焼酎の一升瓶等、ガラス製品全般に利用される。ここではその一例として火山灰硝子を使用した退避壕を紹介する。



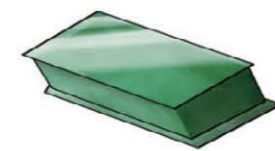
※三宅ガラスを参照



### 退避壕

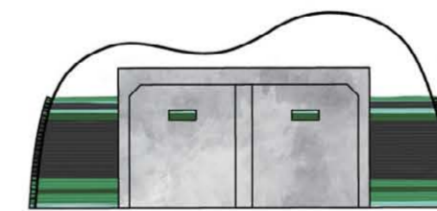
桜島では退避壕と呼ばれる施設が島中に点在している。しかし、現在の施設は目立たず、劣化も早い。そこで現在の退避壕に変わるものとして、火山灰硝子による退避壕を提案する。これは島民の暮らしや火山の様子、島と人間関係を顕在化する。

【ガラスブロック】※日本電気硝子製品を参照



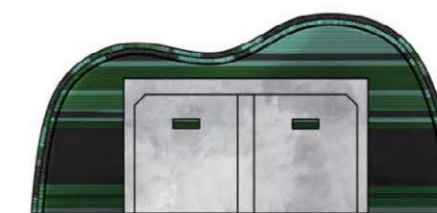
210×100×60mm

火山灰硝子から加工したガラスブロックをモジュールとする。メタルジョイント工法を応用。



### Phase1. 1～20年

ガラスブロックを積む。ガラスブロック積みは1-2か月に一度、島民と観光客の手で行われ、浮かび上がる縞模様は火山活動の歴史を顕す。使用される火山灰硝子は最も近い集落由来のものを使用する。島内においても降灰量は不均一であるため、退避壕ごとにその様相は異なる。



### Phase2. 20～50年

構造が安定し、従来のコンクリート造の退避壕との世代交代を行う。



### Phase3. 50～100年

ガラスブロックを新たな年代のものに取り換えながら維持する。一部は店舗に代わるなど、使われ方も変化する。取り換えられたガラスブロックは再利用され、一部のブロックは当たり年のワインのような魅力を見出されるかもしれない。



### Phase4. 100年～

噴火によって島の一部は溶岩に覆われ、溶けた退避壕は大地と同化し、島に還る。共生してみえた硝子の風景は一変し、制御不能な自然の厳しさを、人間の驕りを突きつける。そして時は流れ、人間は再びこの地に住み始めるだろう。